

ヒンディー語母語話者による日本語名詞句構造習得に関する予備的調査

— 格助詞「の」を中心に —

久野 美津子

【要旨】

本稿は、日本語の名詞句構造に関わる「の」の習得について調査したものである。被験者はこれまでほとんど報告のないヒンディー語母語話者である。来日後3週目から16週目までの発話データを収集し、それらを記述的に記すと共に、習得の最初期の特徴を記した。調査の結果、「名詞句+の+名詞句」構造では、4週目から適格構造と不適格構造とが同時に観察され始めた。不適格構造では「の」の脱落や、他の助詞「は」「を」を代用した誤りなどが観察された。一方、「形容詞句+名詞句」構造は発話回数が少なく、「の」の過剰生成も観察されなかった。これらの特徴を、白畑・久野(2005)で提示されている『「の」の発達段階』と比較した結果、本被験者には「第一段階」が見られない点、「の」の過剰生成が見られない点で違いはあったものの、習得の最初期に「の」の脱落や、適格構造と不適格構造との混在が見られたという点で共通点が見られた。

【キーワード】 ヒンディー語、名詞句構造習得、格助詞「の」、発達段階、脱落の誤り

1. はじめに

第二言語(L2)としての日本語の名詞句構造習得を調査した研究は、幼児、成人など幅広い年齢の学習者を対象に数多く行われており(Clancy1985、白畑1993、迫田1999、奥野2000、2001、2002、白畑・久野2005)、「の」の過剰生成をめぐる議論も盛んである。さらに、白畑・久野(2005)では、縦断的な発話データを基に、名詞句構造に関わる「の」の発達段階が提示され、その最初期には「の」を脱落する段階があると報告されている。ただし、これまでの研究では、被験者の多くは中国語、英語、韓国語などを母語(L1)とする学習者であり、ヒンディー語母語話者を対象とした研究は、筆者の知る限りないと思われる^①。そこで、本稿では、ヒンディー語をL1とする学習者の名詞句構造習得について、来日直後の発話データから得た習得の特徴を記すとともに、白畑・久野(2005)で提示されている発達段階と比較した。

2. 先行研究

2.1 先行研究概観

L2学習者の名詞句構造や格助詞「の」に関する習得研究はこれまで数多くなされ、代表的なものには、成人を対象とした迫田(1999)、奥野(2001)、幼児を対象とした白畑(1993)、そして、児童を対象とした白畑・久野(2005)などがある。

迫田(1999)は、韓国語、中国語、英語をL1とする学習者それぞれ20名(計60名)を初・中・上・超級という4つのレベルに分け、彼らの発話データを分析した。分析対象と

したのは名詞句、形容詞句、動詞句を修飾要素とする名詞句構造である。調査の結果、いずれのL1グループからも「の」の過剰生成が観察され、特に中級レベルの学習者に誤りが多かったと報告されている。また、中国語母語話者については、英語母語話者や韓国語母語話者に比べ、上級レベルになっても「の」の過剰生成が多く観察される点が指摘されている。ただし、迫田（1999）の分析対象とした不適格構造は「の」が過剰生成された構造のみであり、「の」を他の助詞で代用した誤りや「の」が脱落した誤りは分析から除外している。

奥野（2001）は、日本語コースで学ぶ学習者の、学習開始時と終了時とに得られた発話データに基づき、「の」の過剰生成が観察されるかどうか考察した。被験者のL1と人数はそれぞれ中国語11名、英語6名、仏語1名、西語1名、独語3名（計22名）である。結果は、中級学習者には「の」の誤りが多く、また、適格構造と不適格構造とが混在していることや、上級レベルでは中国語母語話者に「の」の過剰生成が多いことを報告している。そして、これらの結果は迫田（1999）の結果と一致していると述べ、L1転移の可能性を示唆している。ただし、奥野（2001）が分析対象とした不適格構造も、迫田（1999）と同様、「の」を過剰生成した誤りのみであり、「の」の脱落や他の助詞による代用の誤りは分析対象外である。

白畑（1993）は韓国語をL1とする幼児（来日年齢4歳1ヵ月）の、滞在3ヵ月目から13ヵ月目までの名詞句構造を調査した。結果は、「Noun Phrase(NP)1+の+NP2」が滞在5ヵ月目に初めて観察され、それと同時期に「*Adjective Phrase(AP)+の+NP」という「の」の過剰生成も観察された点や、7ヵ月目に適格構造「AP+NP」が出現し、適格構造と不適格構造とが混在するようになった点、そして、9ヵ月目以降に「*AP+の+NP」が観察されなくなった点などを報告している。ただし、白畑（1993）の課題として、観察開始時期が滞在3ヵ月目からであったため、習得の最初期の発達過程が明らかではない点や、被験者の少なさなどが考えられる。

2. 2 白畑・久野（2005）

白畑・久野（2005）は、白畑（1993）で残された課題を解決するため、日本語を学習する中国語母語話者1名（A児）と英語母語話者2名（B児、C児）の発話データを基に、名詞句構造の発達過程を調査した²⁾。分析方法としては、「の」の過剰生成の誤りだけでなく、脱落や他の助詞による代用の誤りも含め、本来「の」が使用されるべき義務的生起文脈をすべて網羅した発話データを分析した。彼らの来日年齢は8～11歳である。データ収集の期間はA児、B児、C児それぞれ、滞在2～26ヵ月目、1～14ヵ月目、1～21ヵ月目である。

調査の結果、彼らの習得には共通した主な特徴が3つ見られた。1つ目は、「NP1+の+NP2」構造に関して、3名共に滞在1～2ヵ月目から「*NP1+NP2」という「の」の脱落した誤り（例：*トイレかみ）が、「NP1+の+NP2」よりも先か、または遅くとも同時期に観察されたことである。特にC児の場合、2つの構造間の出現時期の隔たりが相対的に大きく、「*NP1+NP2」が発話されてから3ヵ月経って初めて「NP1+の+NP2」が発話された。また、これら両構造（「*NP1+NP2」「NP1+の+NP2」）は3名共に長期間

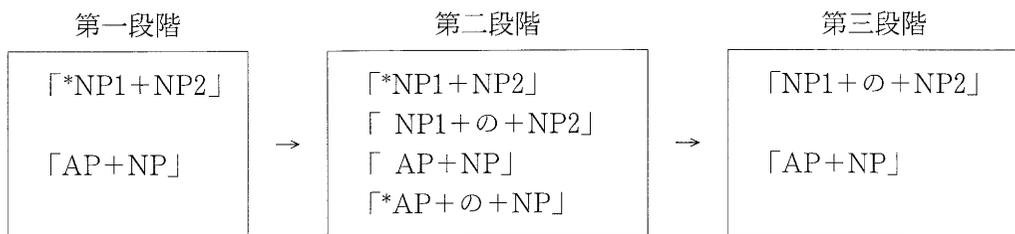
にわたって混在していた（A児、B児、C児それぞれ20ヵ月間、10ヵ月間、14ヵ月間）。

2つ目の特徴は、「NP1+の+NP2」構造で、3名共に「の」の代わりに他の助詞を代用する誤りが、出現率は低いものの、観察されたことである。A児には「は」「が」「な」「に」「と」による代用の誤り、B児とC児には「は」による代用の誤りが観察された（例：*わたしはお父さん）。このうち、「は」による代用は3名に観察され、その観察時期はA児が3～12ヵ月目、B児とC児が4～6ヵ月目であり、比較的早期であった。

3つ目の特徴は、「AP+NP」構造の習得において、中国語、英語というL1の異なる被験者が同一の習得過程をたどったことである。それは、最初期には「の」が付与されない「AP+NP」のみが観察され、その後「*AP+の+NP」が「AP+NP」と共に一定期間観察されるが、最終的には適格構文のみが発話されるようになるという習得過程である。

これらの結果を基に、名詞句構造に関わる「の」の発達段階を示したものが(1)である。発達段階のうち「第一段階」は「の」の出現がなく、「*NP1+NP2」や「AP+NP」が現れる。しかし、「AP+NP」には「の」が不必要であるため、表面上は適格に使用されているように見える。「第二段階」は「の」を付与するという規則を次第に認識してくる段階で、「NP1+の+NP2」が出現してくるようになる。ただし、修飾要素の語彙がどのような性質を持つのか（名詞的素性の有無 [+N/-N]、動詞的素性の有無 [+V/-V]）などの習得が未完全であるため、依然として「NP1+の+NP2」構造で「の」を脱落したり、逆に「の」を付与してはならない「AP+NP」に「の」を過剰に適用したりする⁽³⁾。語彙の性質を習得するのにかかる時間は学習者のL1の特性の相違によって左右され、その差が「第二段階」に留まる期間の違いとなって反映される。「第三段階」は関連する規則の習得が確実なものとなり、「*NP1+NP2」や「*AP+の+NP」が消失し、適格構造だけが適用される段階である。

(1) 名詞句構造に関わる「の」の発達段階



この発達段階は、名詞句構造習得の普遍的な発達段階として提案されていることから、L1の異なる被験者であっても、基本的にはこれと類似した過程をたどることが予想される。本稿では、来日直後の発話データを用いることから、特に「*NP1+NP2」の出現の有無や出現時期などに留意して調査したい。

3. 調査

3. 1 データ収集方法

被験者はヒンディー語をL1とするインド人留学生（S、30代男性）1名である。2007年

10月2日に来日した。来日前に日本語の学習経験はほとんどなく、数字の1から10までの表現を少し知っている程度だった。彼は同月10日から日本語の初級クラスで日本語を学習し始めたが、日常生活では英語を使用しており、日本語の授業中も、日本語より英語を用いて会話をする傾向が強かった。データの収集期間は、彼の来日後3～19週目（滞在1～5ヵ月目）である。ただし、13～15週目は冬季休暇の時期に当たり、調査を行うことができなかった。データ収集方法は、Sと観察者（筆者）が1回につき約45分間（初回のみ20分間）の自由会話をし、それを録音し、後に文字化した。データ収集の回数は合計12回であり、合計時間は515分間である。

分析対象とした名詞句構造は、「NP1+の+NP2」と「AP+NP」である⁽⁴⁾。これらの名詞句構造は日本語の初級クラスで比較的早期に導入される項目である。本被験者の場合、「NP1+の+NP2」は滞在2週目（調査開始前）に、「AP+NP」は滞在6～7週目に導入され、その後の授業でも折に触れ文法説明や練習などが行われていた。発話データのうち、単なる繰返しは調査対象とはせず、自発的な発話を対象とした。

3. 2 ヒンディー語の名詞句構造

本被験者のL1であるヒンディー語の名詞句構造について簡単に記し、日本語の名詞句構造との比較をする。そして、ヒンディー語が日本語の名詞句構造習得に与えると予想される影響について考えたい⁽⁵⁾。ヒンディー語には動詞や関係詞などを用いた様々な名詞句構造の表現があるが（田中・町田2003、西岡2005）、ここでは日本語の「NP1+の+NP2」「AP+NP」に相当する表現について述べる。

3. 2. 1 「NP1+の+NP2」に相当するヒンディー語表現

「NP1+の+NP2」の「の」に相当するヒンディー語には後置詞kāがあり、「NP1+kā+NP2」という語順で用いる⁽⁶⁾。ただし、kāは被修飾要素である名詞（NP2）の性（男性形、女性形）、数（単数形、複数形）、格（格を明示する後置詞を伴う「斜格形」、後置詞を伴わない「直格形」）の違いに応じてke、kīに変化する。kā、ke、kīの使い分けについては、kāは名詞（NP2）が男性・単数・直格形の場合に用い、それ以外の男性名詞の場合はkeを用いる。女性名詞の場合はkīを用いる。表1には簡単に用例を記した⁽⁷⁾。

表1 名詞（NP2）の性・数・格の違いによるkā、ke、kīの使い分け

性・数 \ 格		直 格 形		斜 格 形	
男性名詞	単数形	aap	kā beta あなた の 息子	aap	ke bete (ko) あなた の 息子 (に)
	複数形	aap	ke bete あなた の 息子達	aap	ke betō (ko) あなた の 息子達 (に)
女性名詞	単数形	aap	kī betī あなた の 娘	aap	kī betī (ko) あなた の 娘 (に)
	複数形	aap	kī betiyā あなた の 娘達	aap	kī betiyō (ko) あなた の 娘達 (に)

古賀・高橋（2006）によれば、kāの主な用法は以下(2)のようなものがある。用例は古賀・高橋（2006）やHardev（1984）から引用した。

(2) 後置詞kāの用法

a. 所属や帰属の関係を表し後続の語を修飾・限定する。

例： rām kā chhoṭā bhāī, aam kā phal
 ラーマ の 小さい 兄弟 マンゴー の 実

b. 動作・作用の主体であることを表す。

例： sāt kanikhō kī mṛityu, haddī kā ṭūṭunā
 7人 鋤夫 の 死 骨 の 折れること（骨折）

c. ある性質を持つ主体やある状態の主体であることを表す。

例： nīd kī kamī
 睡眠 の 不足

d. 動作・作用の場所や方向、対象、範囲などを表す。

例： laṇḍan kī yātrā, U.S.A. kī rāīfal
 ロンドン（へ）の 旅行 合衆国（製） の ライフル

e. 後続の語の材料であることを表す。

例： lohe kā hatthā, kāgaz kī phirkī
 鉄 の ハンドル 紙 の かざぐるま

f. 後続の語の状態の原因を表す。

例： kuposhāṇ kā shikār
 栄養不良 の 犠牲

g. 後続の語の手段を表す。

例： havāī-jahāz kī yātrā
 飛行機 の 旅

h. 目的や用途を表す。

例： rupayō kī tāīlī
 お金 の 袋

3. 2. 2 「AP+NP」に相当するヒンディー語表現

日本語の「AP+NP」に相当する表現は、ヒンディー語でも形容詞を用い「AP+NP」となる。このとき、āで終わる形容詞は修飾する名詞の性・数・格の違いに応じてe、īに変化するが、その他の形容詞は変化しない。表2にはāで終わる形容詞（achchhā、いい）の用例を記した。

表2 名詞の性・数・格の違いによる形容詞の変化

性・数 \ 格		直格形	斜格形
男性名詞	単数形	achchhā laṛkā いい 少年	achchhē laṛke (ko) いい 少年 (に)
	複数形	achchhē laṛke いい 少年達	achchhē laṛkō (ko) いい 少年達 (に)
女性名詞	単数形	achchhī laṛkī いい 少女	achchhī laṛkī (ko) いい 少女 (に)
	複数形	achchhī laṛkiyā いい 少女達	achchhī laṛkiyō (ko) いい 少女達 (に)

3. 2. 3 日本語の名詞句構造習得に対するL1の影響

ヒンディー語をL1とする学習者が日本語の「NP1+の+NP2」「AP+NP」構造を習得する際のL1転移の可能性について考えたい。まず、「NP1+の+NP2」構造の場合、ヒンディー語では後置詞kāが必要であり、さらにkāはNP2の性・数・格によって変化する。これは、L1では複数の形式を持つが、日本語では1つの形式で表す「統合」という対応関係に相当し(野田他2001)、学習者にとっては習得が比較的容易であることが予想される。また、学習者の習得過程は、初期の段階から「の」が付与され、適格に「NP1+の+NP2」が発話される可能性がある。もし、初期の段階で「の」がない「*NP1+NP2」が発話された場合には、L1転移の影響とは考えがたい。

次に、「AP+NP」構造の場合、ヒンディー語の形容詞には語尾が変化しないものと変化するもの(āで終わるもの)との2種類がある。そして、変化する場合には、名詞の性・数・格の違いに応じて語尾を変化させる必要がある。一方、日本語では、ナ形容詞とイ形容詞との2種類の形容詞があり、その種類の違いを覚える必要があるが、同一の形容詞を複数の形式に使い分ける必要はない(例:赤い花、赤い服)。そのため、同構造の習得が学習者にとって非常に困難であるとは考えがたい。同構造では、ヒンディー語でも日本語でも「の」に相当する要素は不要であることから、習得過程の初期段階で「AP+NP」が発話されると予想される。もし「AP+NP」構造で「*AP+の+NP」が発話された場合には、L1からの転移であるとは考えにくい。

4. 結果と考察

4. 1 調査結果

調査の結果、滞在4週目以降に「NP1+の+NP2」構造が観察され始め、8週目以降に「AP+NP」構造が観察され始めた。ただし、自発的な発話回数は観察期間を通じて少なく、さらに、17~19週目には当該構造が一度も観察されなかったため、以下では3~16週目の結果について述べる⁽⁸⁾。表3には構造別に発話回数を記した。

まず、「NP1+の+NP2」構造の場合、適格構造が滞在4週目から観察され始めた。そして、その後も断続的ではあるが観察され、11週目には他の週よりも多く観察された(10回)。ただし、この適格構造は12週目以降は一度も観察されなかった。適格構造が観察さ

れ始めた4週目には不適格構造の「*NP1+NP2」と「*NP1+は+NP2」も観察された。これらは断続的にはあるが16週目まで観察された。この他にも、不適格構造として、発話回数は少ないものの、「を」を用いた「*NP1+を+NP2」(11週目)や、NP1とNP2の順序が逆になった「*NP2+NP1+の」(5、11週目)、「*NP2+NP1」(9週目)、「*NP2+の+NP1」(11週目)が観察された。さらに、11週目には不要な箇所「の」を用いた「*NP1+の+NP2+の」も見られた。

表3 Sの調査結果

名詞句構造 \ 週数		3	4	5	6	8	9	11	12	16
NP1 + の + NP2	「NP1+の+NP2」	-	3	2	1	1	-	10	-	-
	「*NP1+NP2」	-	1	-	1	1	1	2	2	2
	「*NP1+は+NP2」	-	2	-	-	-	-	1	1	1
	「*NP1+を+NP2」	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	「*NP2+NP1+の」	-	-	1	-	-	-	1	-	-
	「*NP2+NP1」	-	-	-	-	-	1	-	-	-
	「*NP2+の+NP1」	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	「*NP1+の+NP2+の」	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	分析困難	-	2	-	1	-	-	2	-	-
AP + NP	「APな+NP」	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	「*AP(な)+NP」	-	-	-	-	2	-	-	-	-
	「APい+NP」	-	-	-	-	-	-	-	-	3
	分析困難	-	-	-	-	-	-	-	-	1

次に、「AP+NP」構造の場合、自発的な発話回数が少なく、8週目にナ形容詞を用いた発話が3回、16週目にイ形容詞を用いた発話が3回観察されただけであった。このうち、ナ形容詞を用いた発話では不適格構造が観察された。それは「きれいな」とすべき箇所を「きれい」としたものだ。

Sの発話例(会話例)を(3)~(11)に構造別に記す。発話者Rは観察者である。< >には発話状況を、()には言葉を補った。発話例右側の()には出現時期を記した。

(3) 「NP1+の+NP2」

a. R: これは本です、ね。

S: ヒストリーのほんです。 (4週目)

b. R: Sさんは毎日TVを見ますか?

S: みません にほんごの にほんごの チャンネル (5週目)

R: わかりませんか?

S: わかりません。

c. R: <絵を見ながら> このコンピューターは誰のですか?

S: ガール

R: ルウさん

S: ルウさんの コンピューター。(11週目)

d. R: <絵カードで売り場を説明> 私は服が欲しいです。服はどこにありますか?

S: 1かい1かい 1かいの センター あります (11週目)

(4) 「*NP1+NP2」

a. R: これは日本語の本です。・・・じゃ、これは?

S: *サイエンス ほん (4週目)

b. R: 何を買いましたか?

S: *に ジャパニーズ にほんご ドールズ (6週目)

c. R: どこで食べましたか? 食堂で食べましたか?

S: レストラン

R: 浜松のレストランで?

S: *はままつ レストラン (9週目)

d. R: <絵カードで使い売り場を説明> 時計はどこにありますか?

S: とけいは とけい とけいを 2かい

R: 1階

S: *1かい1かい 1かいの エレベーター まえ (11週目)

e. R: 東京へ行きましたか?

S: ない。

R: 行きませんでしたか?

S: いきませんでした。*わたし ともだち who is いる とうきょう
went to some other place (12週目)

f. R: (家族は) みんな元気ですか?

S: いぬ いぬ is also げんきです。*わたし いぬ is also げんきです。(16週目)

(5) 「*NP1+は+NP2」

- a. R: 私のうちは掛川です。Sさんのうちは?
S: *わたしは うち は かいかんです。(4週目)
- b. R: Sさんの学校は静岡大学ですね?
S: *がっこうは わたしは がっこう は しずおかだいがく。(4週目)
- c. R: あの鞆は誰の鞆ですか?
S: mine it's mine *わたしは かばん です。(11週目)
- d. R: そのパーティーは一人で行きますか?
S: ひとりで いきますか
and my *わたしは インドじん ともだち stay atとうきょう (12週目)
- e. R: これはいいテストですね。悪いテストですね。
S: いいです、わるいです。
R: わたしのヒンディーは悪いです。
S: *わたしは にほんご です わるいです。(16週目)

(6) 「*NP1+を+NP2」

- R: <絵カードで売り場の説明> 何を買いたいですか?
S: テレビを なにを なにを
R: テレビが欲しいですか? ジャテレビはどこにありますかって (尋ねてください)。
S: テレビ テレビを どこに ありますか?
R: テレビは4階にあります。4階の、これ (この絵) はエスカレーター?
S: *エスカレーターを ちかくに。(11週目)

(7) 「*NP2+NP1+の」「*NP2+NP1」「*NP2+の+NP1」

- a. R: 映画を見ますか?
S: *えいが はままつの わかります。(5週目)
R: わかりませんか?
S: ません わかりません。
- b. *まえ ザザンティー (9週目)
- c. R: 誰のマイクですか?
S: Hせんせい マイク マイクの Hせんせい (11週目)

d. S: カフェテリア せいきょうの コーヒーを (11週目)

R: 飲みました。

S: のみました。

R: 生協のコーヒー? カフェテリア?

S: カフェテリア。

R: 2階のね? じゃ生協でコーヒーを飲みました。

S: のみました。

(8) 「*NP1+の+NP2+の」

R: このカメラは (誰のもの) ?

S: カメラは

R: ジュディさん

S: ジュディさん *ジュディさんのカメラの です。(11週目)

(9) 「AP+NP」

a. S: わたしは しんかんせんで ひろしま きました。

R: それから?

S: それから みやじみ きました。

R: 宮島?

S: みやじま みやじまから きました。*きれい きれいな プレイス。(8週目)

b. R: 新幹線はどうでしたか?

S: どうでしたか? ..オーしんかんせん きれい きれいな しなかんせん (8週目)

c. R: (Sさんのバイクは) 大きいバイク?

S: no ちいさい バイク (16週目)

d. R: Sさんは何が好きですか?

S: なにか?

R: タバコが好きですね?

S: すきです。

R: お酒が?

S: すきです。

R: 他には?

S: あまい あまいりょうり カリー many things たくさんたくさん。(16週目)

e. R: これは鞆です。どんな鞆ですか?

S: おおきい。

R: 大きい鞆。

S: おおきいかばん。

R: これは? 小さい。

S: ちいさい ちいさい かばん。(16週目)

(10) 分析困難⁽⁹⁾

a. R: <英語の辞書を見せながら> これは何の辞書ですか? これは英語。

S: じしょ、English じしょ

R: 英語

S: えいごの でいしょの

R: 辞書

S: でいしょの ほん ですか? (4週目)

b. にほんご クラス (6週目)

c. <電気会社で働くインド人の絵> カーラさんは インド じんの でんき (11週目)

d. R: どんな飲み物が好きですか?

S: コーヒーをあついです。(16週目)

4. 2 白畑・久野 (2005) との比較

4. 2. 1 「NP1+の+NP2」構造習得の比較

Sの結果を、白畑・久野 (2005) の結果と比較する。まず、「NP1+の+NP2」構造習得の類似点について述べる。主な類似点は3つある。1つ目は、白畑・久野 (2005) で観察されたのと同様に、本調査でも「NP1+の+NP2」構造で、「*NP1+NP2」が早期から観察されたことである。白畑・久野 (2005) の被験者3名の場合、滞在1~2ヵ月目から「*NP1+NP2」が出現し、その時期は「NP1+の+NP2」よりも先、あるいは遅くとも同時期であった。Sの場合も、「*NP1+NP2」の出現は「NP1+の+NP2」と同時期の4週目であった。SのL1であるヒンディー語ではほとんどの場合「の」に相当する語が必要であり、「*NP1+NP2」がL1転移による誤りであるとは考え難い⁽¹⁰⁾。

2つ目の類似点は、適格構造(「NP1+の+NP2」)の出現後も「*NP1+NP2」が観察され、これらの両構造が混在していた点である。白畑・久野 (2005) の被験者達の場合、混在期間は長期(10~20ヵ月間)にわたっていた。Sの場合、観察期間が短いため、正確に比較することは難しいが、4~11週目までは混在が確認され、その後も16週目まで「*NP1+NP2」は観察された。

3つ目の類似点は、「の」の代わりに他の助詞の使用が観察された点である。代用として用いられた助詞は白畑・久野 (2005) の場合は「は」「が」「に」「と」などであり、Sの場合は「は」「を」であった。これらの助詞のうち、「は」は本被験者および白畑・久野 (2005) の被験者3名から観察され、出現時期も早かった。白畑・久野 (2005) によれば、「は」は被験者が最初に発話した助詞であったという。これはSの場合も同様であっ

た。Sは滞在2週目に日本語の授業で「NP1はNP2です」（例：私は学生です）という構造を学習しており、この構造が名詞句構造の誤りの一因となっている可能性も考えられる（*わたしはうちはかいかんです、*わたしはにほんごですわるいです）。

次に、相違点について述べる。主な相違点は1つあり、それは、NP1とNP2との順序が逆になった「*NP2+NP1+の」「*NP2+NP1」「*NP2+の+NP1」という不適格構造がSから観察された点である。このような語順は日本語にはなく、彼のL1であるヒンディー語にも存在しない。Sは普段から会話のほとんどを英語に頼っていたことから、英語をそのまま訳すことによって、このような誤りが生じたと思われる（例：in front of ZAZA city、*まえ ザザシティー）。

4. 2. 2 「AP+NP」構造習得の比較

「AP+NP」構造習得について白畑・久野（2005）の結果と比較する。まず、主な類似点は、習得の最初期に「AP+NP」のみが観察されたという点である。白畑・久野（2005）の被験者3名の場合、最初期には「AP+NP」のみが観察されていた。一方、Sの場合も、期間中に観察されたのは「AP+NP」のみであった。

次に、主な相違点が2つある。1つ目は、Sの場合、同構造の発話回数が非常に少なかった点である。白畑・久野（2005）の被験者の場合、同構造は「NP1+の+NP2」構造と同時期あるいは1ヵ月後に観察され始め、その後は毎月数多くの発話が観察されていた。一方、Sの場合、8週目と16週目に3回ずつ観察されただけである。発話が少ない理由の一つとして考えられるのは、Sが形容詞を「AP+NP」（例：きれいな花）という連体修飾語の用法としてではなく、述語（例：きれいです）として用いる傾向が強かった点である。例えば(11)は観察者が「AP+NP」構造で質問しているのに対し、Sが述語の用法で答えている例である。

- (11) a. R: (Sさんの部屋は) **どんな部屋** ですか?
 S: **あたらしい** but **おおきい** しい (8週目)
 R: 小さい?
 S: ちいさい
- b. R: Sさんの車は **どんな車** ですか?
 S: **はやい** インドで。(16週目)
- c. R: Sさんの車は **大きい車** ですか?
 S: **おおきい** です。(16週目)

このように、Sは、形容詞の種類の違いによって形の変化する「AP+NP」構造を避け、学習方略の1つとして、述語としての用法を多く用いていた可能性が考えられる。

2つ目の相違点は、Sには「AP+NP」構造で「の」の過剰生成が観察されなかった点である。白畑・久野（2005）の被験者の場合、まず「AP+NP」のみが観察されたが、そ

の後3名全てに（それぞれ1、3、5ヵ月後に）「*AP+の+NP」が観察されるようになった。一方、Sの場合、8週目と16週目に「AP+NP」が観察されたものの、「*AP+の+NP」は観察されなかった。その理由の一つとして考えられるのは、Sが適格な「の」の用法をまだ十分には認識せず、「*AP+の+NP」を発話する段階にまで至っていなかったという可能性である。白畑・久野（2005）の被験者の場合、「*AP+の+NP」が観察され始めた時期は、「NP1+の+NP2」構造で適格な「の」が毎月継続的に数多く観察されるようになった時期と重なっていた。一方、Sの場合、11週目に適格な「の」の発話回数は一旦増えたものの、その後、観察されなくなった。「の」の過剰生成は「NP1+の+NP2」として用いるべき「の」を、誤って「AP+NP」にも適用することにより生じると考えられている。したがって、Sに「*AP+の+NP」が観察されなかったのは、彼が、本来「NP1+の+NP2」構造で用いる「の」の用法さえ、まだ十分認識できていなかったためではないかと考えられる。

4. 2. 3 発達段階の比較

以上の調査結果を基に、Sの名詞句構造の発達段階を、2.2節の(1)で記した白畑・久野（2005）による『『の』の発達段階』と比較してみたい。(1)では「*NP1+NP2」「NP1+の+NP2」「AP+NP」「*AP+の+NP」の4種類の構造を用いて発達段階を示している。そこで、これら4種類についてSの場合と比較したものが表4である。

表4 発達段階の比較

	第一段階	第二段階	第三段階
白畑・久野(2005) の発達段階	「*NP1+NP2」 「AP+NP」	「*NP1+NP2」 「NP1+の+NP2」 「AP+NP」 「*AP+の+NP」	「NP1+の+NP2」 「AP+NP」
Sの発達段階		「*NP1+NP2」 「NP1+の+NP2」 「AP+NP」	

比較の結果、主な相違点が2つある。1つ目は、Sには「第一段階」および「第三段階」が観察されなかった点である。「第三段階」がないのは、Sがまだその段階まで達していないためと考えられるが、「第一段階」が観察されなかったのは、Sが既に「第二段階」に達していたためではないかと考えられる。自然な言語習得環境で学んだ児童であっても、滞在2~3ヵ月目に観察を開始した場合には「第一段階」が観察されなかったという報告がある（白畑1993、白畑・久野2005）。Sの場合、観察開始は滞在1ヵ月目ではあったが、観察開始前に既に日本語の授業で「の」を学習していた。このことから、彼が、観察開始時には「第一段階」を過ぎ、既に「第二段階」に到達していたという可能性は否定できない⁽¹¹⁾。

2つ目の相違点は、Sには「第二段階」での「*AP+の+NP」が観察されなかった点である。その理由は、Sは「第二段階」には達したものの、まだその初期にいたためではな

いかと考えられる。Sからは「NP1+の+NP2」が一時期観察されていたが（4～11週目）、その後観察されなくなり、12週目以降には「*NP1+NP2」（と「*NP1+は+NP2」）のみが観察されるようになった。このことから、Sの「第二段階」は「第一段階」に非常に近い状態であり、さらに「*AP+の+NP」が出現する前の状態であったのではないかと予想される。

以上のことから、Sの「の」の発達段階は、白畑・久野（2005）の提示した発達段階と比べ、「第一段階」が見られない点、「の」の過剰生成が見られない点で違いが見られた。しかし、習得過程の最初期に「*NP1+NP2」が観察された点や、「*NP1+NP2」と「NP1+の+NP2」との混在が確認された点などを考慮すれば、両者の発達段階は基本的には類似したものであるとも考えられる。

5. おわりに

本稿では、ヒンディー語をL1とする学習者Sの来日直後の発話データを基に、名詞句構造の習得の特徴を記した。ヒンディー語の名詞句構造はほとんどの場合、「の」に相当する語を必要とするが、本被験者のデータからは、L1（あるいはL2である英語）からの転移の影響では説明できない「*NP1+NP2」が確認された。さらに、適格構造と不適格構造との混在や、他の助詞を代用した「*NP1+は+NP2」なども観察された。これらの特徴は、先行文献で報告されているL2学習者の名詞句構造習得の特徴とも類似したものであった。また、本被験者の名詞句構造の発達段階を白畑・久野（2005）で提示された発達段階と比較した結果、「第一段階」が観察されず、「*AP+の+NP」も観察されなかったという点で違いが見られた。しかし、習得過程の最初期から「*NP1+NP2」が出現している点や、「NP1+の+NP2」の出現後も「*NP1+NP2」との混在が見られた点などから、本被験者の場合も、基本的には白畑・久野（2005）の発達段階と類似した過程をたどるのではないかと考えられる。

本稿では被験者が1名であり、観察期間も比較的短期間であったことから、今後、より多くの被験者からデータを得て、調査を進めていく必要がある。

注

- (1) 山田・中村（2000）は留学生の作文データ（2回分）から「の」の誤用分析をしており、被験者には「インド語」の母語話者も含まれているが、それがヒンディー語かどうかは明らかではない。
- (2) 白畑（1993）と分析方法を統一するため、ナ形容詞は分析対象としていない。
- (3) 丸田・平田（2001）、中村・金子・菊地（2001）などによれば、名詞は [+N、-V]、形容詞は [+N、+V]、動詞は [-N、+V]、前置詞や後置詞は [-N、-V] という素性を持つ。つまり、[N] の素性の有無に関係なく、[-V] 素性を持つものが修飾要素になる場合は「の」が付与され、[+V] 素性を持つものが修飾要素になる場合は「の」が付与されないことになる。
- (4) 名詞句構造にはこの他にも「後置詞句+の+名詞句」（例：友人からの手紙）があるが、同構造は本調査では1度も観察されていないため、分析対象としていない。また、

- NP2を省いた「NP1+の」(例：私の)も正誤判断が困難なため、対象としなかった。
- (5) 被験者のL2である英語については、「の」を表す表現として'sやofなどがある。また、「の」に相当する表現を用いずlibrary book (図書館の本)のように用いることもある。日本語の名詞句構造習得にL2がどの程度関わっているか等についての議論は、今後の課題としたい。
 - (6) 同格(例：社長の田中さん adhyakṣa Tanaka)、数量(例：3人の友 tīn dost)を表す場合や、一語の名詞として扱われる場合(例：道路建設 sarak-nirmāṇ)などはkāを用いない。表記について、ヒンディー語はデーヴァナーガリー文字を用いる言語であるが、本稿ではHardev (1984)を参考にローマ字で記した。
 - (7) 表中の斜格形の例にあるkoは、日本語の「を」「に」「は」などに相当する後置詞である。また、人称代名詞の場合には、merā (私の)、hamārā (私たちの)、terā (お前の)、tumhārā (君達の)のようにkāを用いない表現もあり、これらもNP2の性・数に応じて変化する(例：merā betā、私の息子。mere bete、私の息子達。merī betī、私の娘)。この他に、名詞句が目的場所や時を表し、文中で副詞句のように用いられる場合、NP2が男性形ならkeが、女性形ならkīが用いられる(例：vah aap ke ghar jāegā、彼はあなたのうちへ行くだろう)。また、NP1が時や期間を表す場合には、keが省略されることもある(例：kuch dinon bād、数日後)。
 - (8) 17週目以降に名詞句構造が観察されなくなった一因としては、冬期休暇中(13~15週目)に日本語を使用しなかったため忘れた可能性や、日本語の授業(『みんなの日本語初級1』の後半)で動詞の活用形が数多く導入されたことにより、データ収集の際、動詞を中心とした会話が増えたことなどが考えられる。
 - (9) 例えば、(10a)はEnglishを形容詞、名詞のいずれとして用いているのか、判断が困難である。また、(10b)の「日本語クラス」は1つの名詞として扱うことも可能なため、分析困難とした。
 - (10) 例えば4週目に観察された「*サイエンスほん」は、ヒンディー語の表現ではkīを必要とするため(sāins kī kitābまたはvigyān kī kitāb)、これがL1転移の影響による誤りである可能性は低い。ただし、science bookという英語の転移の影響による誤りである可能性は否定できない。しかし、「*NP1+NP2」の誤り全てが英語の転移の影響によって説明できるわけではない(例：*わたしいぬ)。
 - (11) 観察初回である第3週目には名詞句構造は1度も観察されなかった。この時、被験者は緊張もしており、自分は日本に来たばかりで日本語はまだ話せないという理由で、観察者の日本語の質問に対し、ほとんど全て英語で答えていた。観察時間も20分と短かった。そのため、第3週目に彼がどの程度名詞句構造を習得していたのかを正確に把握することができなかった。

【参考文献】

- Clancy, P.M. (1985) The acquisition of Japanese. In Slobin, I.D. (Ed.), *The Cross Linguistic Study of Language Acquisition, 1*, 373-524. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Hardev Bahri (1984) *Learners' Hindi-English Dictionary*. Kashmere Gate, Dehli: Ravindra Printing Press.
- 石沢弘子・豊田宗周 (監修) (1998) 『みんなの日本語初級 I 本冊』スリーエーネットワーク
- 古賀勝郎・高橋明 (2006) 『ヒンディー語=日本語辞典』大修館書店
- 丸田忠雄・平田一郎 (2001) 『語彙範疇 (II) 名詞・形容詞・前置詞』研究社
- 中村捷・金子義明・菊地明 (2001) 『生成文法の新展開』研究社
- 日本語教育学会(編) (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- 西岡美樹 (2005) 「ヒンディー語のいわゆる名詞句について—属格後置詞‘ka’を中心に—」『京都産業大学論集』人文科学系列第33号、74-98、京都産業大学
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 小川芳男・林大 他(編集)日本語教育学会(編) (1982) 『日本語教育事典』大修館書店
- 奥野由紀子 (2000) 「第二言語習得における言語転移の認証—先行研究からの課題—」『教育学研究紀要』46(2)、384-389、広島大学
- (2001) 「日本語学習者の『の』の過剰使用に関する一考察—縦断的な発話調査に基づいて—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 (文化教育開発関連領域) 50、187-195
- (2002) 「上級日本語学習者における言語転移の可能性—『の』の過剰使用に関する文法判断テストに基づいて—」『日本語教育』116、79-88
- 迫田久美子 (1999) 「第二言語学習者による「の」の付加に関する誤用」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』平成8年度~10年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書 327-334
- 白畑知彦 (1993) 「幼児の第2言語としての日本語獲得と『ノ』の過剰生成—韓国人幼児の縦断的研究—」『日本語教育』81、104-115
- 白畑知彦・久野美津子 (2005) 「L2児童による日本語名詞句構造内での『ノ』の習得」*Second Language Vol.4*、29-50、日本第二言語習得学会 (J-SLA)
- 田中敏雄・町田和彦 (2003) 『CDエクスプレスヒンディー語』白水社
- 山田真理・中村透子 (2000) 「連体修飾の『の』に関する中級学習者の習得状況とストラテジー」『2000年日本語教育学会春季大会予稿集』93-98

A Preliminary Study on the Acquisition of Japanese Noun Phrases by a Hindi Speaker : Focus on the Case Particle *no*

HISANO, Mitsuko

This paper is a preliminary investigation of the acquisition of *no* in Japanese noun phrases (“NP+*no*+NP”, “AP+NP”). The subject is a Hindi speaker. The aim of this research is mainly to describe his speech and the tendencies of the noun phrases at the early stage of acquisition. Samples of spontaneous speech were collected longitudinally for 14 weeks (starting from the 3rd week after his arrival to Japan).

The results show that in the case of the “NP+*no*+NP” structure, he came to produce *no* correctly with the ungrammatical structures from the 4th week. The ungrammatical structures included the utterances without *no*, the replacement of *wa* or *o* with *no*, and so on. On the other hand, in the case of the “AP+NP” structure, his utterances were so few, and “overgeneralized *no*” didn’t appear. Comparing these results with “the acquisition process of *no*” proposed in Shirahata & Hisano (2005), there are some similarities and differences. The similarities mean that the utterances without *no* were observed at the early stage, and furthermore, both the grammatical structure and the ungrammatical structure were observed at the same time at the early stage. The differences mean that “the first stage of the acquisition process of *no*”, (at which only the utterances without *no* are observed), was not found in this subject, and also “overgeneralized *no*” was not observed.